

## はらわた紳士——散歩する人体解剖図とその系譜

竹原 直道

宗像市

明治以降に作られた胃腸薬の売薬袋の宣伝デザインの一つに、高橋善丸が「はらわた紳士」と呼ぶ、立派な髭を生やし内臓を晒した男の図がある（高橋善丸：『くすりとほほえむ元気の素』2011）。西洋医学書の解剖図は、元々ポーズをとった立位で描かれることが多いので、はらわた紳士の描き方そのものは西洋医学書の作法から外れてはいない。はらわた紳士図像は解剖学書のページから抜け出したかのようなものから、とても人体解剖図には見えないものまで多様である。高橋がはらわた紳士の内臓の配置がいかげんだ、というのは当たっている。しかし演者の目的は、はらわた紳士図像の解剖学的誤りを指摘することではない。はらわた紳士はいかなる人体解剖図を参考にしたのか、その系譜を明らかにすることである。

人体解剖図や人体模型を薬種屋の宣伝に用いる手法は、江戸時代から見られる。例えば、一隣斎芳兼筆「五臓圓売薬入歯店舗絵図」には、薬種屋の店頭に人体解剖模型を展示している様子が描かれている（新藤恵久：『木床義歯の文化史』1994）し、五臓図をデザインした薬の効能書や引札も散見される。明治以降、新たな西洋風人体解剖図＝はらわた紳士図像が、庶民に馴染みの図像として抵抗なく受け入れられた背景には、明治始めから取り入れられた初等教育において、「小学人体問答」あるいは「初学人身窮理」といった小学校教科書が与えた影響が大きい（月澤美代子：「明治初期日本における西洋解剖学的人体イメージの普及過程—上田文齋の内臓図」日本医史学雑誌 59(2)：209, 2013）。更に明治中期以降も「中学生理教科書」といった書籍が刊行されたので、西洋解剖学的人体イメージは庶民の間にも広く行き渡った。

ここではらわた紳士の実例を見て行くことにしよう。はらわた紳士の初期のものに、その処方ボードインから譲り受けたという1879（明治12）年創業の太田胃散の商標がある。これは口から肛門まで消化管だけを描いたイラストレーションだが、小腸の描き方が特徴的で、上から重層的に丁寧に折りたたまれた形状で描かれている。この特徴ある小腸図は、演者が参照できたカルヴィン・カッター原著「喝氏初学人身窮理 上巻」（1881）に全く同じデザインがあるので、これを参考にしたものだろう。時系列が合わないように見えるが、カッターの書は既に明治初年に翻訳され、「初学人身窮理」等の書名で保健衛生教科書として普及していた（樋口輝雄：「1830年代アメリカの保健啓蒙書：W.A. オールコット著 “The House I Live In”」日本歯科医史学会誌 30(4)：366, 2014）というから矛盾はない。次に1922（大正11）年の日付が確認できる「アイフ」（愛腑）という胃腸薬がある。このはらわた紳士は、胸部まで解剖されており、右胸部には肋骨が、左胸部には肺が描かれ、胃は冠状断されている。この図は様々に模倣されたらしく、昭和前期、戦後期のものがいくつも確認できる。後になる程、形が崩れている。この肺の描き方は、例えば石原弘編「人体解剖学 中」（1911）や、鍼灸解剖図（1952）（M. Sappol/L. Lindgren: Hidden Treasure: The National Library of Medicine, 2012）に類似のものがあるので、胸部解剖図の描き方の一つの典型であろうが、微妙に異なっている。また薬袋には基本的に日付記載がないので、いつごろ作られたかを同定するのは困難だが、幾つかのかなりいい加減なはらわた紳士図に、例えば「新編生理教科書」（1897）などの内臓図との類似性が認められた。

以上のように一見「でたらめ」と思える売薬袋の内臓図も、それなりの保健衛生書等に原図を求めることが可能であると思われた。明治以降の医学と保健教育の発展が反映した結果であるといえよう。同時に、はらわた紳士は胃腸薬販売促進戦略の人気キャラクターとして一人歩きを始めたのであった。